

漢法苞徳塾資料	No. 520
区分	資料
タイトル	体調の異常が主として凝りの反応を現す仕組みについての問題
著者	八木素萌
作成日	2000.01.05

イ、『運動不足病 - 運動不足に起因する病気とその予防』（ヴィルヘルム・ラープ、ハンス・クラウス共著、広田 公一、石川 旦 訳：ベースボール・マガジン社）の示唆しているもの

……快・不快、……闘うか？逃げるか？＝戦闘に備える体制、怠惰な生活

→ a. 静脈血の還流不良

b. 自律神経機能の低下・停滞

c. 筋力低下に伴う関節の接合の狂い発生、関節拘縮に伴う血行やリンパ循環への低下・停滞および神経機能への悪影響などなど～。

ロ、『タンパク質の音楽』（深川洋一著：筑摩書房）は「病気というのは、タンパク質の合成異常が原因であるケースがほとんどだからだ」と指摘した。そして、「健康な人の体内では、さまざまなメロディーが美しく調和しながら交響曲を奏でている。……中略……病気になるというのは、からだのどこかが不協和音を奏でるようになることである。」と表現している。ここでは「病気というのは、タンパク質の合成異常が原因であるケースがほとんど……」の指摘が重要。

ハ、『靈枢』経脈第 10 では〈病に際しては経脈上に虚ないしは実の反応を現わす〉ことを指摘しており、また、『素問』調経論第 62 では〈五蔵は経脈の機能を通じて全身の血気を行らせているので、血気の不和からあらゆる病が生じる、故に、経脈の機能を大切にしなければならない〉と強調して、〈外感病の場合も、内傷病の場合にも、経脈上に虚ないしは実の反応を現わすこと〉を指摘したのち、その〈経脈上の虚実反応というのは、凝り反応が主なものであって〔虚の凝り〕と〔実の凝り〕は〔状態が異なっている〕〉点を教えている。

ニ、『素問』挙痛論第 39 には、〔絀急〕や〔縮蹇〕の語が見え、『難経』の「24 難」の「三陰三陽の絶証に関する記述」や「37 難」の「邪が陽にある場合には陽脈不和となって気が其の部分に滞留し、邪が陰にあれば陰脈不和を引き起こし血がそこに留滞する……」などと言う記述と「48 難」の「外痛内快・為外実内虚・内痛外快・為内実外虚……」の記述、この記述に関連していると思われる『素問』調経論第 62 の上述の（ハ）の論などを考え、また同時に『靈枢』九鍼十二原第 1 中の「……神客在門・未睹其疾・悪知其原〈神と客門に在り・いまだ其の疾を睹ざれば・悪んぞ其の原を知らん〉……」という記述について『靈枢』小鍼解第 3 では解説している。それは、「神客者・正邪共会也。神者・正気也。客者・邪気也。在門者・邪循正気之所出入也。〈神と客とは正と邪の共に会うなり。神とは正気なり。客とは邪気なり。〉」と述べているのである。双方の文章を考え合わせると、病的反応が体表に表現される場合の圧痛反応の重要性が理解されるものと言えよう。病的

反応表現に関する記述としては『靈枢』九鍼十二原第 1 に「……今夫五藏之有疾也・譬猶刺也・猶汚也・猶結也・猶閉也。〈今夫れ五藏の疾あるや・譬は刺ささるるが猶きなり・汚れの猶きなり・結ぼれの猶きなり・閉さるるが猶きなり〉……」という記述がある。

2000.01.05 記